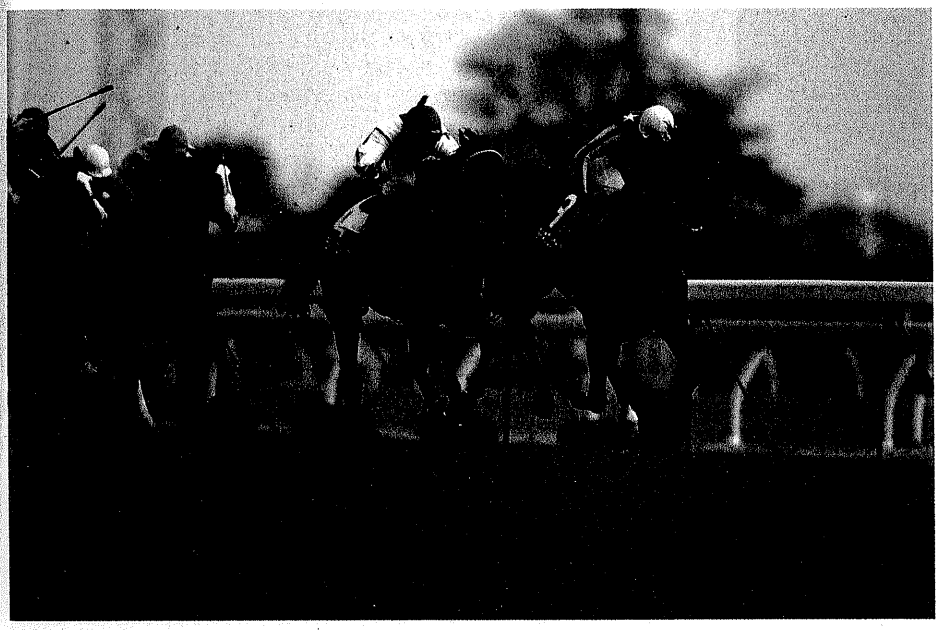
The 1995 JRA CLASSIFICATIONS

'95 JRA クラシフィケーション(フリーハンデ)決定!

JRAのフリーハンデは、1962年から本誌上で発表されてきた。これはその年度の実績馬の力量を重量で表し、その年のみならず、歴年の名馬たちの実力比較ともなった。しかし、国際化が進展し、わが国独自の格付けでは不都合なこともあり、昨年から基準を整備し見直しを図った。ことしはさらに前進して、国際格付委員会で評価された数値を尊重して格付けを行った。名称も"フリーハンデ"から"JRAクラシフィケーション"と改めた。



ジャパンカップ

'95年から欧米と統一した基準で格付け
――インターナショナルクラシフィケーションとの関わり

94年に国際化、地方との交流を念頭におき、距離を短距離、中距離、長距離に分けるなどフリーハンデの作成基準が変更されたが、95年はさらに前進したものとなった。

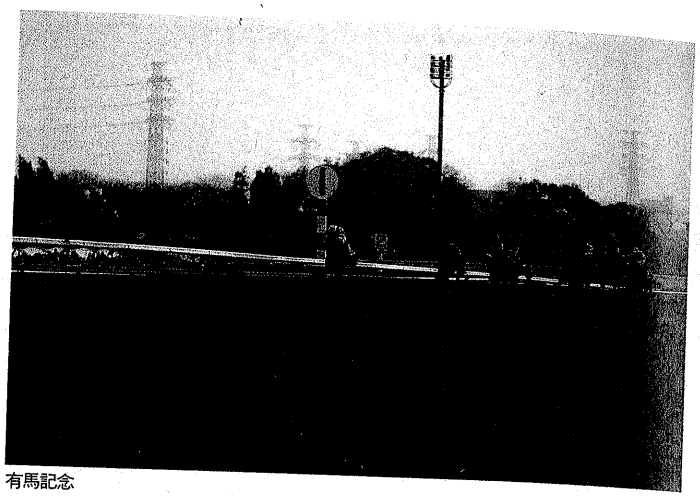
まず、これまでの〝フリーハンデ〟という名称を〝JRAクラシフィケーション〟に改めることとなった。95年12月にアイルランド(ダブリン)で開催された国際格付委員会にJRAのハンデキャッパーも参加し、わが国の国際競走で優勝した外国馬や海外の重賞競走で活躍した日本馬について、インターナショナルクラシフィケーションにおけるレイトを協議決定している。このことからわが国におけるそれらの馬の評価もその数値を尊重したものでなければならず、その点でインターナショナルクラシフィケーションと歩調を合わせることとなった。

従って名称も今回から変更したわけであるが、クラシフィケーションとは〝格付け〟ということで、欧米の統一フリーハンデも正確には〝インターナショナルクラシフィケーション〟と称する。この95年度のインターナショナルクラシフィケーションによると、ダンスパートナーは−13ポンド、キログラムに換算して5Iキロ、JC馬のランドは−25ポンドで56・5キロということになる。両馬のキログラムの換算値が示すとおり、クラシフィケーションの数値をそのまま使うと、4歳牝馬のトップやリストアップすれば古馬のトップと目される馬の数値としては、これまでに比べ極端に低いもので、それ以下の馬たち、即ち重賞勝ち馬の大半は50キロ以下ということになってしまう。従って数値についてはやはり昨年度改めた基準に則して決定することとした。その結果、各部門別、個々の馬の数字をご覧いただくとわかるとおり、インターナショナルクラシフィケーションの数値とJRAのそれとを比較すると両者間にはおおむね5キロの開きがある。

対象馬については前年と同じくおおむねGI5着、GII3着、GIII2着まで、およびオープン競走1着馬で、50キロ以上の評価が与えられる馬とする。3歳馬についてはこの基準にかかわらずリストアップする馬もいる(指定交流競走に出走した地方競馬所属馬も含む)。また95年からはJRAの国際競走に出走した外国馬も対象とすることとした。ただし、地方所属馬、外国馬ともJRAのレースでの評価ということになるため、例えば外国馬であれば、インターナショナルクラシフィケーションでの評価と若干数値が整合しない場合もありうる。さらにJRA所属馬については地方競馬、海外での成績も考慮している。

フリーハンデからクラシフィケーションへ

――レベルは総じて高くなかったが、明るい話題もある



有馬記念

95年を振り返ってみると一年を通じて主役と呼べるような馬は不在であった。三冠馬ナリタブライアンは緒戦の阪神大賞典を圧勝しながら体調を崩して戦線離脱。秋には復帰したものの天皇賞、ジャパンC、有馬記念とも期待に応えられなかった。2番手のエアダブリンは4歳時以上の成績を残せず、スターマンも故障で早々に休養に入ってしまった。ナリタブライアンに代わる存在として注目された宝塚記念優勝馬ダンツシアトルは秋競馬に駒を進めることができず、またダービー馬タヤスツヨシなど春の4歳クラシック上位馬も尻すぼみの結果に終わってしまった。その中でヒシアマゾンと夏に大きな成長を見せたマヤノトップガンが、秋の競馬を大いに盛り上げてくれたのが救いであった。

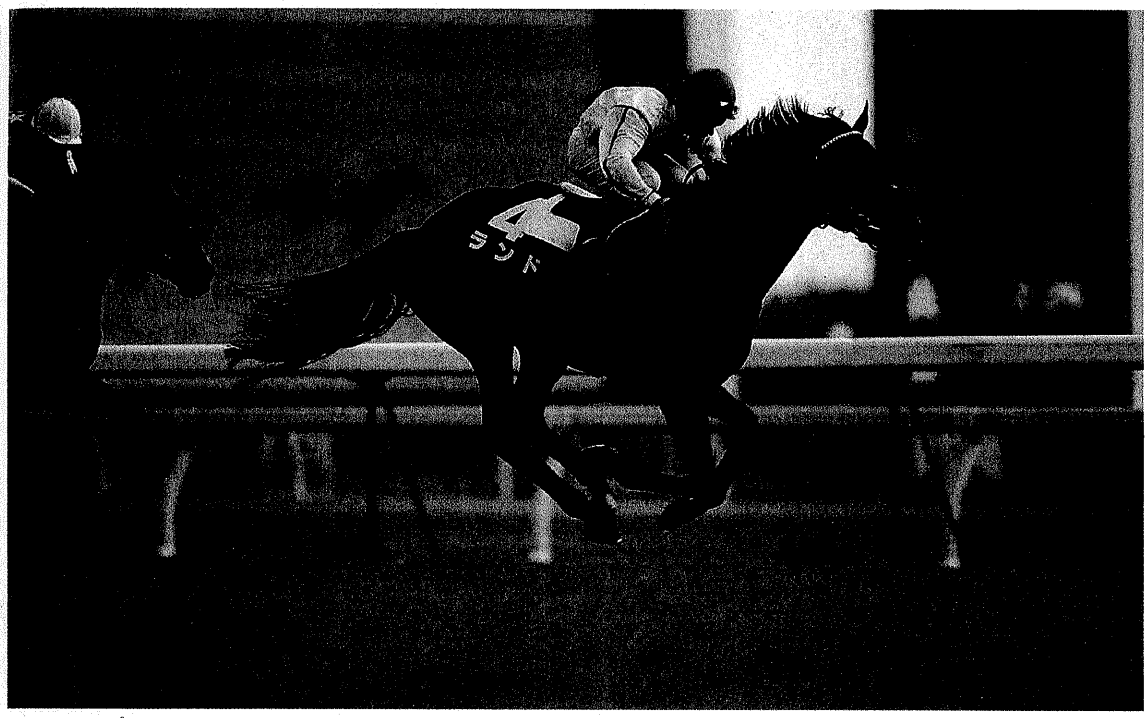
全体的なレベルも決して高くはなかった。それは国際競走を見てもわかるように94年は日本馬がGIを全勝したが、95年はスプリンターズSの一勝に止どまった。来日した外国馬の質にしても前年以上とは言いがたく、そこで一勝しかあげられなかったことはレベルの低さを物語っている。スプリンターズSはヒシアケボノ、有馬記念はマヤノトップガンが制したが、古馬の層の薄さを証明することとなった。

といって4歳馬のレベルが高いかというとこれまた疑問だ。95年の4歳馬は夏以降の古馬混合重賞に6勝しており、前年のII勝にははるかに及ばないものの、ミスターシービー世代の7勝、シンボリルドルフ世代の5勝と大きな違いはない。しかし、古馬の層が薄かったことを考えると、有馬記念の優勝はあるものの、6勝というのは物足りない数字である。

明るい話題と言えば、何といっても日本馬が海外のレースで好走したことだろう。全部で7頭の馬が遠征し、ヒシアマゾンを除く6頭が8戦したが、クロフネミステリーがディスタフH3着、ダンスパートナーがノネットT賞2着、タニノクリエイトが香港国際ヴァーズ4着、ドージマムテキが香港国際ボウル5着とそれぞれ奮闘、そしてフジヤマケンザンが香港国際カップに優勝し日本馬として初めて海外の国際Gレースを勝ったのである。フジヤマケンザンに刺激され、これを機に海外に遠征する馬が増えることを願ってやまない。

1995年ＪＲＡクラシフィケーション（５歳以上）

キロ	馬名（生産国／調教国）	性齢	短距離 ～1600	中距離 1600超 ～2200	長距離 2200超
61.5	外ランド(GER/GER)	6			61.5
60.0	外エルナンド(FR/FR)	6			60.0
59.5	外タイキブリザード(USA)	5			59.5
59.0	外アワッド(USA/USA)	6			59.0
58.5	サクラチトセオー	6		58.5	58.5
	外ヒシアマゾン(USA)	牝5			58.5
58.0	外ダンツシアトル(USA)	6		58.0	
	ナリタブライアン	5			58.0
57.5	ライスシャワー	7			57.5
57.0	父フジヤマケンザン	8		57.0	
56.5	エアダブリン	5		56.5	56.5
	ステージチャンプ	6			56.5
	外ハートレイク(GB/UAE)	5	56.5		
56.0	父アイルトンシンボリ	7		56.0	
	父他トロットサンダー	7	56.0		
	マチカネタンホイザ	7		56.0	
55.5	父カネツクロス	5			55.5
	サクラローレル	5			55.5
	外ドゥマーニ(USA/UAE)	5	55.5		
	ハギノリアルキング	6			55.5
	外ビコーペガサス(USA)	5	55.5		
55.0	父インターライナー	5			55.0
	父ゴーゴーゼット	5			55.0
	外ソーファクチュアル(USA/UAE)	6	55.0		
	トーヨーリファール	6		55.0	
	父トーワウィナー	6	55.0		
	父ドージマムテキ	6	55.0		
54.5	父インターマイウェイ	6		54.5	
	ホクトベガ	牝6	54.5	54.5	
	父マイシンザン	6		54.5	
	ワコーチカコ	牝6		54.5	
54.0	ナイスネイチャ	8		54.0	
	父ニホンピロプリンス	7	54.0		
53.5	アイリッシュダンス	牝6		53.5	
	カミノマジック	5			53.5
	サマニベッピン	牝6		53.5	
	外ダンシングサーバス(IRE)	6		53.5	
	チョウカイキャロル	牝5		53.5	
	ビコーアルファー	6	53.5		
53.0	父システィーナ	牝7	53.0		
	父他スガノオージ	5		53.0	
	スギノブルボン	5			53.0
	父タマモハイウェイ	6			53.0
	ビッグショウリ	5	53.0		
	ホクトフィーバス	5	53.0		
	父ポジー	牝6		53.0	
	ムッシュシェクル	8		53.0	
52.5	他イナズマタカオー	5	52.5	52.5	
	父ウインドフィールズ	5		52.5	
	エーブアゲイン	5		52.5	
	外エイシンワシントン(USA)	5	52.5		
52.0	オフサイドトラップ	5		52.0	
	ゴールドマウンテン	7	52.0		
	スターバレリーナ	牝6	52.0		
	父トーワダーリン	牝6	52.0		
	ノーブルグラス	牝5	52.0		
51.5	父インタークレバー	5		51.5	
	シュアリーウィン	6			51.5
	外シンコウキング(IRE)	5	51.5		
51.0	父アグネスパレード	牝5		51.0	
	オギティファニー	牝5	51.0		
	スプリングバンブー	牝6		51.0	
	ホッカイセレス	牝6		51.0	
	マーメイドタバン	7		51.0	
	ユウトウセイ	6		51.0	
50.5	シアトルスズカ	5		50.5	
	外フィールドボンバー(USA)	5	50.5		
	メイショウレグナム	8		50.5	
50.0	父アラタマワンダー	7		50.0	
	ゴールデンジャック	牝5		50.0	
	父スーパープレイ	6		50.0	
	フェスティブキング	5		50.0	
	父ボディーガード	5	50.0		
以上73頭					



ジャパンカップ

5歳以上

ランド61・5キロ、日本馬はタイキブリザードが59・5キロ

さて、JRAクラシフィケーションの評価となるが、これまで4歳と古馬を分けて進行したのを、GI出走馬については、4歳と古馬の区別をせずに評価することから始まった。

95年度トップの評価は、ジャパンCの勝ち馬ランドをおいて他はない。同馬のインターナショナルクラシフィケーションでの評価は125ポンド（56・5キロ）となっているが、国際会議ではジャパンCの優勝が大きな評価ポイントとされた。93年のジャパンCで4着に入ったドイツ馬プラティニよりーポンド高い。ランドの重量については、全体のレベルの低さを考えると昨年の古馬のトップ、ビワハヤヒデ（62・5キロ）までは評価できないが、アメリカの芝のチャンピオンホース、パラダイスクリークをJCで破ったマーベラスクラウンと同程度の評価はできるということで61・5キロとなった。

次にヒシアマゾンが俎上にあがった。ジャパンC2着を最大に評価し、なおかつ日本馬ではトップにすることで見解は一致。58・5キロが与えられた。これは牡馬の斤量に直すと60・5キロとなる。

有馬記念を勝ったマヤノトップガンは60・5キロとなった。菊花賞までだと歴代の4歳馬に比べて高い評価ではなかったが、有馬記念優勝で大幅にプラスとなった。

ジャパンCでヒシアマゾンからクビ差3着のエルナンドは60キロ。さらにハナ差4着のタイキブリザードが59・5キロ。5着アワッドが59キロ。タイキブリザードについては有馬記念での2着もあり60キロという意見もでた。しかし、マヤノトップガンから2馬身も離されており、そこまでの評価はできないということで59・5キロに落ち着いた。

有馬記念3着のサクラチトセオーは58・5キロ。秋の天皇賞をどうみるかだが、出走馬のレベルから、天皇賞ー着と有馬記念3着はほぼ同等ということで、長距離、中距離とも58・5キロとなった。

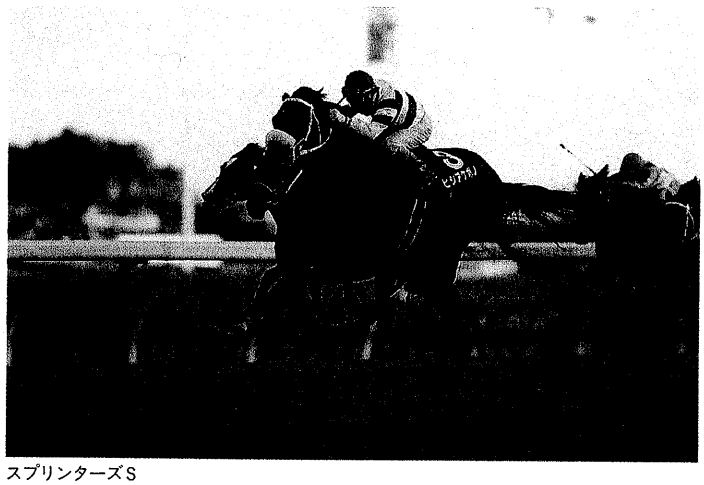
次いでナリタブライアンと宝塚記念の勝ち馬ダンツシアトルが58キロ、ジェニュインが57・5キロ。ジェニュインについては皐月賞優勝よりも秋の天皇賞2着を重視している。フジヤマケンザンは国際GIIの香港国際カップを勝ったことで57キロとなった。

その他の、中距離、長距離区分の古馬については別表を参照していただきたい。

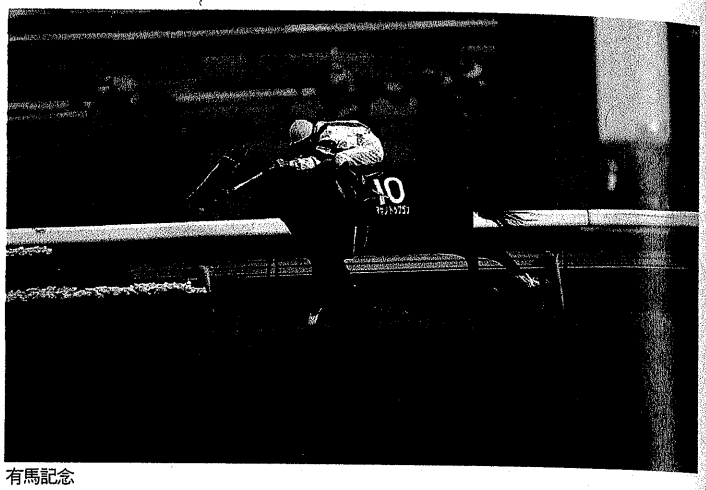
短距離はヒシアケボノにトップの57キロが与えられた。スプリンターズSの他にスワンSをレコード勝ちし、マイルチャンピオンシップの3着もあり、短距離での安定性はだれもが認めるところだろう。ただし、95年の短距離部門は、中距離、長距離以上に層が薄かったといえる。

マイルチャンピオンシップの勝ち馬トロットサンダーは、安田記念の勝ち馬ハートレイクとの比較となった。レースとしては国際レースである安田記念が格上で、出走馬のレベルも安田記念の方が高く、ハートレイク、トロットサンダーという序列にすることで見解は一致した。ハートレイクは56・5キロとし、トロットサンダーは0・5キロ下の56キロで決定をみた。

その他の馬については別表を参照していただきたい。



スプリンターズS



有馬記念

4歳

マヤノトップガンは60・5キロ 短距離部門ではヒシアケボノ57キロ

続いて4歳馬の評価に入った。マヤノトップガンの60・5キロ、ジェニュインの57・5キロ、ヒシアケボノの57キロはすでに決定。ダービー馬タヤスツヨシについて討議された。ダービーを勝ったとはいえ、秋の成績が冴えず評価も並以下とならざるを得ない。前年のダービー2着馬エアダブリンと同じ57キロという意見も出たが、古馬相手にステイヤーズSを勝ったエアダブリンの方が上とみて、0・5キロ下の56・5キロに決定した。

クラシックを前に引退したフジキセキは春の時点では間違いなくナンバーワンホースで、弥生賞でホッカイルソー以下を完封した能力は高く評価されるもので55キロ。菊花賞2着のトウカイパレスとGII2勝のナリタキングオーは54・5キロ、きさらぎ賞を勝ちケンタッキー・ダービーに遠征したスキーキャプテンは54キロが与えられた。またタニノクリエイトは香港国際ヴァーズ4着を評価して、長距離で53キロ（中距離52・5キロ）となった。

一方、牝馬はダンスパートナーの56キロがトップとなる。次いで桜花賞馬ワンダーパヒュームが54・5キロ、アーリントンCで牡馬を破ったエイシンバーリン、エリザベス女王杯を勝ったサクラキャンドル、オークス2着のユウキビバーチェが53・5キロで並ぶ。

オークスの勝ちタイムがダービーより優れていたことから、4歳牝馬のレベルは高いという声も聞かれたが、阪神牝馬特別で3頭のGI勝ち馬が古馬のサマニベッピンに一蹴されたこと等、古馬との戦いでいま一つの成績であったことから、全体的に評価は低いものとなった。ダンスパートナーはオークス優勝の他に、ノネット賞2着、ヴェルメイユ賞6着の成績も加味されている。

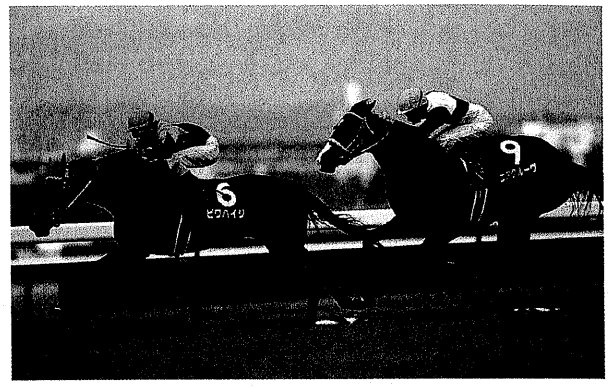
牡、牝ともその他の馬は別表を参照していただきたい。

1995年JRAクラシフィケーション（4歳）

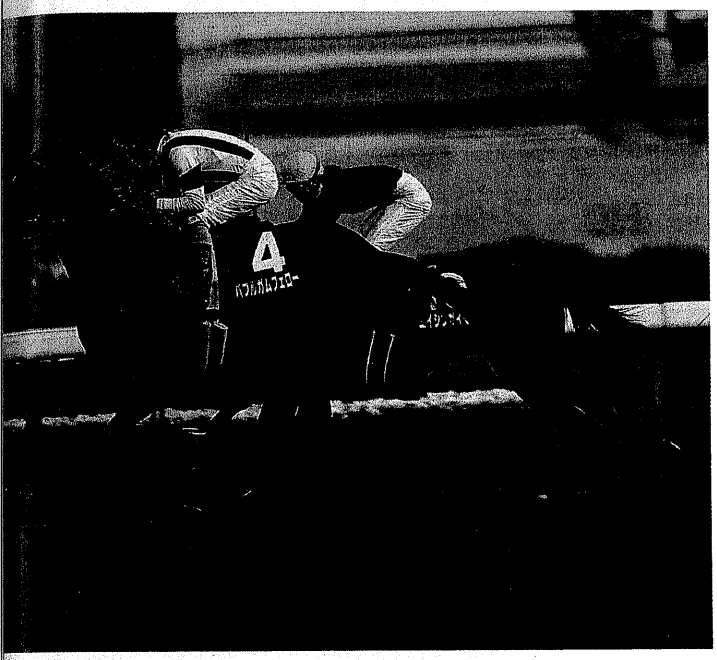
キロ	馬名（生産国）	性	短距離 ～1600	中距離 1600超 ～2200	長距離 2200超
60.5	マヤノトップガン				60.5
57.5	ジェニュイン			57.5	
57.0	外ヒシアケボノ(USA)		57.0		
56.5	タヤスツヨシ				56.5
56.0	ダンスパートナー	牝			56.0
55.0	フジキセキ			55.0	
54.5	父トウカイパレス				54.5
	ナリタキングオー			54.5	
	ワンダーパヒューム	牝	54.5		
54.0	オートマチック			54.0	54.0
	外スキーキャプテン(USA)			54.0	
	ホッカイルソー			54.0	54.0
	マイネルブリッジ			54.0	
	メイショウテゾロ		54.0		
53.5	外エイシンバーリン(USA)	牝	53.5		
	父サクラキャンドル	牝			53.5
	ユウキビバーチェ	牝			53.5
53.0	イブキタモンヤグラ				53.0
	タニノクリエイト			52.5	53.0
	父ニホンピロスタディ		53.0		
	ブライトサンディー	牝			53.0
	プライムステージ	牝	53.0		
52.5	サマーサスピション				52.5
	外プレストシンボリ(IRE)			52.5	
52.0	外コクトジュリアン(USA)		52.0		
	サイレントハピネス	牝		52.0	
51.5	父画ライデンリーダー	牝	51.5		
51.0	サンデーウェル			51.0	
	外シェイクハンド(USA)	牝	51.0		
	シグナルライト				51.0
	タイブルース		51.0		
	父ダイタクテイオー			51.0	
	ファッションショー	牝			51.0
	フェアダンス	牝			51.0
	マジックキス	牝		51.0	
50.0	イブキニュースター	牝		50.0	
	イブキラジョウモン			50.0	
	オトメノイノリ	牝			50.0
	サイレントキラー			50.0	
	画ハシノタイユウ			50.0	
	画ベッスルキング			50.0	
	マイティーフォース		50.0		
以上42頭					

〈ハンデキャッパー〉

- 本部
  甲佐勇
- 栗東トレーニング・センター
  古橋明、西田研、山田隆雄、又野一仁
- 美浦トレーニング・センター
  今泉俊彰、小林善一郎、井上真、中村嘉宏



阪神3歳牝馬S



朝日杯3歳S

3歳

バブルガムフェローには'94年のフジキセキを上回る55・5キロ

95年も前年同様に外国産馬とサンデーサイレンス産駒の活躍が目立った。わずか2世代の産駒でリーディングサイヤーランキングトップの座につき、3歳部門でも他の種牡馬の追随を許していない。サンデーサイレンスの天下はしばらく続きそうだ。

今回、見解の相違が最も出たのが3歳部門だった。朝日杯3歳Sの勝ち馬バブルガムフェローがトップであることは誰もが認めている。問題は何キロにするかだ。前年のフジキセキと同じ55キロか、フジキセキより上の55・5キロかで分かれたが、「一度負けているバブルガムフェローを、全勝のフジキセキより上にはできない」という55キロ派を退けて、「朝日杯3歳Sの時計比較、勝ち方」を重視し、55・5キロで決着した。関東所属馬がトップに立ったのは91年のリンドシェーバー以来となる。

2位は54キロで朝日杯3歳S2着のエイシンガイモンとラジオたんぱ杯3歳Sの勝ち馬ロイヤルタッチ。

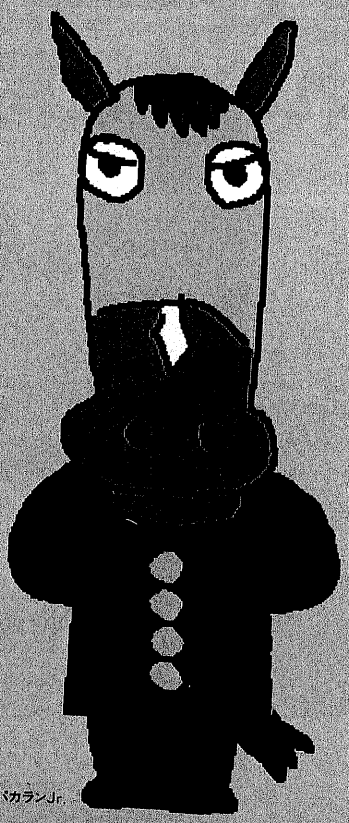
一方、牝馬は阪神3歳牝馬Sの勝ち馬ビワハイジが54キロでトップ。次いで同レース2着のエアグルーヴが53・5キロ。いちょうSの内容からエアグルーヴも54キロという意見もあったが、GIの阪神3歳牝馬Sの結果を重視した。

その他の馬については別表を参照していただきたい。

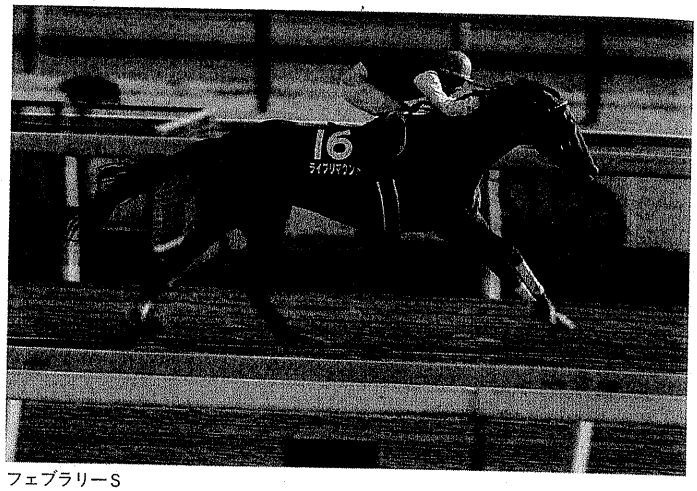
1995年JRAクラシフィシケーション（3歳）

キロ	馬名(生産国)	性
55.5	バブルガムフェロー	
54.0	㋚エイシンガイモン(USA)	
	ビワハイジ	牝
	ロイヤルタッチ	
53.5	イシノサンデー	
	エアグルーヴ	牝
52.5	イブキパーシヴ	牝
52.0	アジュディケーター	牝
	㋜サクラスピードオー	
	センターライジング	牝
	㋚ゼネラリスト(GB)	
	マックスロゼ	牝
	メイショウヤエガキ	牝
51.5	エイシンイットオー	
	㋚ストーンステッパー(USA)	
	㋜タヤスダビンチ	
	ダンスインザダーク	
	ロゼカラー	牝
51.0	㋚ゴールデンカラーズ(USA)	牝
	㋚シロヤマボールド(IRE)	
	㋚スキーミュージック(USA)	
	ソロシンガー	
	㋚ビッグナカヤマ(USA)	
	ブラウドマン	
50.5	インターアーチ	
	シーズグレイス	牝
	スピードクリスタル	牝
	㋚セイントリファール(USA)	
	㋚タイキフォレスト(USA)	牝
	㋚チアフルマスター(USA)	
	㋜㈱テツノジョージ	
	㋚ユノペンタゴン(USA)	
50.0	エイシンピーナス	牝
	エクセレトシャトー	牝
	㋚スギノハヤカゼ(USA)	
	㋚タイキフォーチュン(USA)	
	㋚タヤスバレンシア(USA)	
	㋚トーヨーロータス(USA)	
	ナリタプロテクター	
	ノースサンデー	牝
	㋜マイネオリーブ	牝
	㋚モンテバロン(USA)	
	㋜ロングシコウテイ	
	以上43頭	

オッズ。



競馬まんまん
週刊ギャロップ
Gallop
毎週月曜日発行 一部火曜日 500円(税込み)
主要キヨスク、地下鉄・私鉄売店、コンビニ、産経新聞販売店で



フェブラリーS

ダート

ライブリマウントは57・5キロ 将来は距離別の格付けも

ダート部門は94年に新設された。今回から芝のように距離区分を設けるかで討議されたが、まだ地方も含めた競走体系が確立していないことから、時期尚早ということで見送られた。

95年のダート界はライブリマウントが主役であることに異論はないだろう。フェブラリーS、平安Sの他に、地方の帝王賞、ブリーダーズGC、南部杯を制した。前年のダート部門トップのチアズアトムより明らかに成績は上位で、昨年のチアズアトムが57キロであったことを考えると58キロ以上は当然想定されるところだが、ダート競走はGⅡが頂点であり、現時点では芝のGⅠと同格にみることはできず、従って昨年の基準も見直すということでライブリマウントは57・5キロに決定した。もちろん今後、ダートGⅠが新設されれば再度見直すことになる。

東京大賞典を勝ったアドマイヤボサツと、芝中距離でも55キロの評価のトーヨーリファールが55・5キロで2番手。

その他の馬については別表を参照していただきたい。

1995年JRAクラシフィケーション（ダート）

キロ	馬名	性齢
57.5	ライブリマウント	5
55.5	アドマイヤボサツ	6
	トーヨーリファール	6
55.0	㊙チアズアトム	7
54.5	キソジゴールド	7
54.0	ホクトベガ	牝6
	㊙マルタカトウコウ	6
53.0	ビワセイハ	5
52.5	イブキクラッシュ	6
51.5	㊙㊐ダンディテシオ	7
	マルブツキラメキ	5
51.0	㊙オースミレパード	5
50.5	ヤグライーガー	6
	㊙ロイヤルハーバー	6
50.0	㊙キョウトシチー	5
以上15頭		